

価値葛藤型道德教育教材の開発

浅沼茂（教育学）、橋本美保（教育学）、古屋恵太（教育学）、
柴田祥彦（国分寺高校）、植村利英子（東高津中学校）、小林勇司（お茶の水小学校）、
佐久間茂和（元東泉小学校）、池田伊三郎（大磯小学校）、松本光弘（睦中学校）、
光武充雄（武雄小学校）、倉本哲男（佐賀大学、教育学部）

1. ワーキンググループの概要

メンバーの多くは、かねてより、個性化教育の実践と理論の探究に努めてきたものである。進歩主義教育や個性化教育とは何かという課題、学校現場で実践的に取り組んできたものである。道德教育のように教科を横断してその実践に取り組む必要のあるものは、総合的なプロジェクト学習などの方法によりながら進めて行く方法が妥当であることを熟知している教師の専門家集団である。豊かな感性と公共性概念の発達を、学校の実践的な取組から、長年取り組んできた。

2. 2年間の研究成果

本プロジェクトの取組は、過去数年間での蓄積の上に、各教科また、総合学習の中でも取り組まれてきたし、また、特別活動などの教科外の学習活動においても追求された。教材は、単純に教師が規則や約束事について教訓を話すというやり方ではなく、生徒自身の持っている道德価値意識を「覚醒」という気づきの観点からなされた。この気づきは、ただ「考える」というような指示では成り立ちにくい。そこで「価値葛藤」という場面を抽出し、そのことをきっかけに思考が「喚起」されるという仮定にたつ。したがって、知識注入型の教科単元教材ではなく、プロジェクト型の学習として実践される必要があった。

道德教育は、伝統的に徳目的な項目を並べ、その徳目を目標に何か物語やエピソードなどの読みの教材として実践されることが多かった。日本では、戦前は修身口授から始まり、修身科の成立まで一貫して徳目主義道德がカリキュラムの中心に位置づけられてきた。それは、国語、社会、音楽、体育にいたるまで、総合的な学際的授業として日本の教育体制そのものを支える柱でもあった。戦前の日本の教育が教育勅語体制と言われるゆえんである。ドイツ流の訓育(Zucht)と教育的教授(Erziehung Unterricht)が、身体的訓練と精神的訓練の教育とに分けられ、訓練として教育が主流であったとの説は、戦後の教育学者の間ではまことしやかに言われてきた。しかし、この解釈は、西洋的教育学の日本的受容の問題であって、日本の独自の道德教育的文化的伝統こそが現代の道德教育においても支配的あるのは基本的に変わらない。

それに対して、価値葛藤型の道德教育は、単なる読み方や身体精神訓練教育ではない。それは、読みに始まり、その講釈をする徳育とは異なり、どのような価値が対立しているかに気づかせ、価値判断を迫るといった参加型の学習実践が主流である。

典型的な例が、コールバーグ派のロックウッドが開発した歴史と道德を統合した教科書である。それは、歴史上の事件を単にその内容を紹介するにとどまらず、その事件に含まれる価値葛藤の背景を開示し考えさせるという手法をとる。典型的な単元が、「日系アメリカ人の収容所時代」の話である。それは、日系アメリカ人が、パールハーバー後に人種差別を受け、財産を没収されアメリカ西海岸から内陸の収容所に強制収容されたという事件であった。この事件は、アメリカにとっては恥ずべき人種差別の一大事件であった。自国の歴史にとって汚点となっている日系アメリカ人の

強制収容を人種差別の象徴としてあえて教材化し、その歴史的な事件についての価値判断をアメリカの生徒の問うというやり方は、自分たちの価値意識を開示し、対象化し、あえてどのような価値が問われているかということを確認にした単元であった。意外なことに、現代の日本人の多くは戦争であったから仕方のないことであったというような過去の状況規定に流されてしまいがちである。価値葛藤教材は、どのような時代背景においても一貫して揺るぎない価値判断を求めている。この教材は、時代状況に迎合しがちな、また、対人同調的な圧力に屈しがちな日本人の文化的・価値特性に対して警鐘をならすものであった。

このような価値発達段階において高次の価値判断を求める価値葛藤教材を日本と世界における事件を題材にする可能性を探った。NHKの番組では、下北半島の北限サルの村人へのいたずらにどう対処するかという問題、冷凍保存した受精卵を選択するという命の選択の問題など、すでに価値葛藤に基づく教材を教育テレビにおいて放映していた。NHKのテレビ番組には、現代科学の発展と命の問題、環境の保全と人間の生活の問題など、私たちの日常生活に関連する多くの問題の素材が豊富に含まれている。

本プロジェクトでは、ロックウッドのように社会問題の価値判断を迫るような教材開発もなされた。他方、次の単元も開発された。現代産業のグローバル化が進む中で、自由貿易協定は、日本経済の焦眉の急となっている。その中で、イギリスの看護師の海外からの受け入れた参考例としてNHKが取材している。その番組では、南アフリカの副学長までした看護師エリートが、イギリスの人材供給会社から買ったたかれ、イギリスの介護ホームで働いている場面が映し出される。そこで働く看護師の多くが英語の通ずる国で看護師をしていた者であった。グローバル市場化する労働力として、彼女らはその技能を買われたのである。その看護師の子どもたちは、母親がイギリスで働くことになった結果、南アフリカでプール付きの豪邸を手に入れたのである。場面では、その豪邸で大音響の音楽をバックにパーティをして楽しむ子どもたちの姿が映っていた。このような状況の中で、後輩看護師のディマカツオさんは、シングルマザーで小中学生を抱え、貧しい中で、毎日苦しい仕事を明け暮れる日々を送っていた。南アフリカの暴力事件は多発し、救急医療は崩壊寸前であった。このような状況の中で、彼女は、人材派遣会社と接触し、先進国のヨーロッパやアメリカ行きを希望するかどうかが迷っていた。単元教材は、このようなディマカツオさんが外国行きをすることの是非について価値判断を問うた。前例としては、フィリピンの母親たちがお手伝いさんなどで外国へ働きに行き、外貨を稼ぐ姿が映し出されていた。しかし、帰国した彼女らに待っていたのは、長いこと家族不在であったための家族不和という現実であった。この事例は、経済的な豊かさや引き替えにこのような家族の崩壊の問題が起きることの是非について価値判断を問うということをしている。また、FTAなどの自由貿易協定から日本の介護士・看護師不足を補うための人材移動がどのような結果をもたらすかというようなロールプレイドラマも実践した。

また、小学校低学年向けには、友達に約束したブランコの席取りを約束しない他の子が来て、乗せてほしいと頼まれたとき、どう答えるかというような問題をもって約束と思いやりとの価値葛藤場面に追いやるというような問題もいくつか考案された。

基本的に、道徳ジレンマへの主体的な参加を促すような単元が、人間的な価値のヒエラルヒーを熟考するような機会を作り出し、内面の価値を引き出すことを可能にする。その価値のヒエラルヒーの尺度化は、日本の道徳教育の伝統にはないもので、その研究がさらに必要である。